野村生涯教育だより

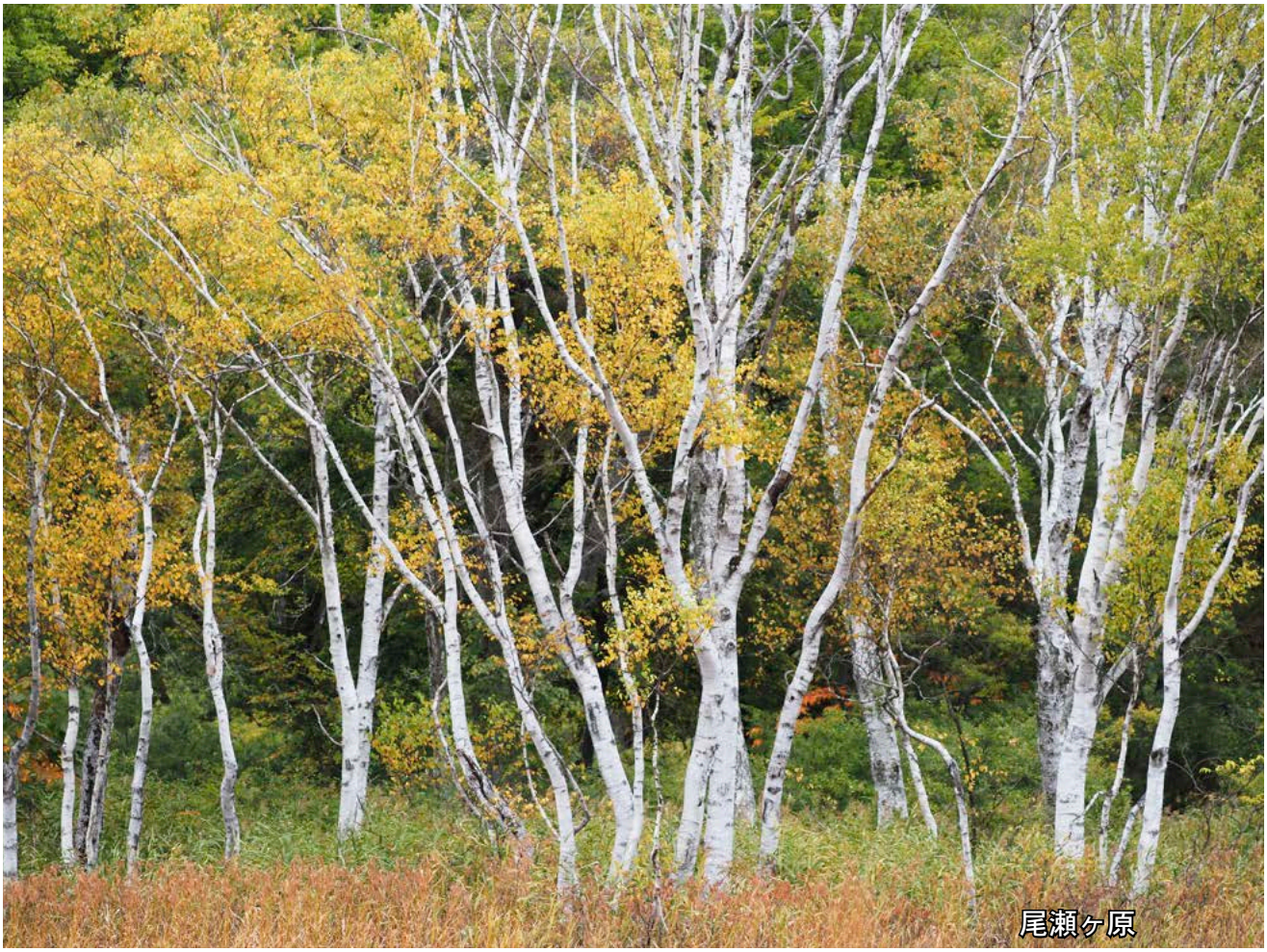
No. 426

発行所
公益財団法人 野村生涯教育センター
東京都渋谷区代々木 1-47-13 〒151-0053
TEL 03-3320-1861　FAX 03-3320-0360
URL www.nomuracenter.or.jp

（公財）野村生涯教育センターの
シンボルマーク
［n］は、名称「Nomura」と、
基本理念「自然観＝Nature」の
頭文字を表している。

もくじ

● 高年講座開講　敬老の日を祝って
● コロナ禍の中で何を課題とするか
● 世界に目を向け自己教育の課題に 幼児教育部



尾瀬ヶ原

高年講座開講
敬老の日を祝って

新型コロナウイルスによる影響が長引く中、今年度の野村生涯教育定例講座は、七月、全国講座の開講を皮切りに、各地域の感染状況等を踏まえ、支部・連絡所でも開講を迎えた。本部講座のひとつである高年講座は、東京都の感染状況等に鑑み、七月開講も延期していたが（本紙四二五号に詳細）九月に入り、東京近県の感染者数が横這い状態ということもあり、開講への願いがいよいよ高まっていた。

金子理事長はじめ担当理事から「特に高齢者の感染は重症化リスクが懸念されているなかで、参加にあたっては家族ときちんと向き合い、講座へ参加する動機についてしっかり話し合うこと」との指針を受け、受講生たちは家族と話し合いを重ねた。この間、そうした家族との調整を課題に、自己教育のプロセスを積み重ねるなかで、高年講座は九月十八日（金）、ようやく令和二年度の開講を迎えることとなった。

開講が九月となり、例年持たれている「敬老の日を祝って」のプログラムが同時に行われることから、当日、金子由美子理事長を迎え、七十六歳から九十二歳までの十四名が、きめ細かに感染対策が取られた当センター第二研修会館に参集した。

午前は責任者工藤道代さんの挨拶に続き、野村生涯教育論「第一章　生涯教育への道程」を高年講座担当の矢野久子さんが講義を行った。

矢野さんは、創設者が説いた「今なぜ生涯教育か」を生涯教育の概念が台頭した一九六〇年代の社会背景とその要因を、一般社会的観点と、野村生涯教育の観点から述べ、その中で「高齢化社会における自立と生きがい」について「『自立』には、肉体的、経済的、精神的自立があり、高齢者自身の生き方で最も大切な要素は『精神的自立』であることを創設者は強調され、これこそ最後まで持続し、人間としての終末を締めくくる最大の『人間らしさ』であるとおっしゃった。私にも必ず訪れる死期を踏まえ、この学びを通して自己を知り、お仲間と共に自己変革に挑戦し続けたい」と語った。

午後は「敬老の日を祝って」とし、全体会が持たれた。理事長は参加者一人ひとりにお祝いの言葉とともに記念品を手渡され、続いて受講生を代表して、井出宏子さんが日頃の感謝を込めて挨拶をし、理事長に花束を贈った。

全体討議では、はじめに手を挙げたTさん（八十代男性）から「ご存知かと思いますが、皆さんと共に学ばせていただいてきた妻が八月に亡くなりました。私が病院に見舞いに行くたびに『センターの皆さんによろしく言ってね』と何度も言っていました。長い間お世話になりましたこと、心から感謝申し上げます」との言葉に、受講生たちが次々と長年共に学んできた思い出やエピソードを話し、故人と共にいるような思いに包まれる中で、受講生全員が積極的に発言をした。

Hさん（八十代女性）の「今日は九十四歳になる主人も出席するつもりでおりました。それで散髪まで済ませて、二、三日後に『腰が立たない』となりました。兵隊にも行き、もともと丈夫な人ですから腰を除けばどこも悪くないのですが、杖をついても怪しくなってしまい『残念ながら今回は駄目かな』と本人が言いましたので、欠席させていただきました。今朝主人から『しっかりやってこいよ』と言われて出てきました。結婚してから六十四年経ちましたが、娘が思春期の頃に色々な問題を出されたことからこの学びにつきました。主人との関係を見直すなかで、おかげさまで娘は今は本当に親孝行をしてくれていますが、このコロナ禍で私たち老夫婦が外に出ることだけはものすごく反対するのです。『センターに行くことを反対しているのではないのよ。お母さんがそんなに行きたい

のなら、ラッシュを避けて気をつけて行ってね』と言ってくれるのですが、帰りが少しでも遅くなると急に口調が厳しくなります。私が大雑把でのんびりしていて、娘は神経が細かいものだから、気になるみたいなのです」との発言に、理事長は「娘さんが、センターの学びがHさんの生きがいであり、またご主人様がどれほどセンターを大事にされているかを受け止めていらっしゃることを今のお話から感じました。私はHさんが大雑把だとは思いませんが、娘さんのDNAはHさんご夫婦から受け継がれているものですから、もしHさんに似ていないとしたらご主人に似ているはずですよね。そうすると娘さんとの関係はご主人との調和の問題に繋がると思うのです。ですからご主人との関係を改めて見直すことが大事なことだと思います。また、今日の講義にあった、知力・能力・体力すべて子どもの方が勝ってきて、自分たちは衰えていくことは自然の摂理ですから、どこを子に従い、どう自分の生きがいや目指す方向性を見失わないように調整していくか、そこが今後の高齢者の課題であることを思います」と応えた。

Tさん（八十代女性）は「私に持病があるものですから、うちの娘もものすごく神経質になって『近所の八百屋さんまでは行っていいけれど、それ以外は駄目』と管理してくるのです。主人も囲碁教室に行きたくて仕方が無いのですが『電車が危ないから駄目』と止められています。講義を聞いて、娘や息子が学生時代だった高度成長期に、当時住んでいた団地の皆さんがものすごく教育熱心だったものですから、私もあれこれ子どもを管理し、自分の気持ちを優先してきたことを思い出し、反省になりました」と話した。

Dさん（八十代男性）は「本日は理事長からお祝いをいただき感謝しております。また講義を聞き、自分の精神的な陶冶というものはまだまだと思い、残りの年月でその陶冶をどれくらいできるだろうかと考えました。この半年、家にいることが多くなり、当初は困ったと思っていたが、今まで経験したことのないような時間をいただいた。今まで家内に『きっとこうだろうな』と思っていたことが、そうでもないことが随分見え、また逆にあまり感心できないところも見えてきた。そうした時間は決してマイナスではなく、良かったと思っています。その反面、体力はだいぶ落ちてしまったので、毎月このように皆さんとお会いし、お話できたらありがたい」と発言。

理事長は「Tさん（女性）のご発言から、子どもに見えるものを『私は子どもを管理し、育ててきたのだな』と自分の課題にすることが大事で、心配して言ってくれているとは思っても『うるさいな』とか『大丈夫よ』とか、そういう思いになった時に『子どもにこういう思いをさせてきたのか』と見ることだと思いました。そうすると、人間として感じ、感じさせる思いを娘さんと共感できるということにも繋がるのではないでしょうか。

またDさんが、今までに経験したことのない時間をどう受け止めていくかということの中で、マイナスだけではないとおっしゃったことも、大事な視点だと思います。経済活動の停滞やテレワークで在宅となり、喧嘩が増えている夫婦や〝コロナ離

婚〟という言葉まであるなかで、野村生涯教育の『触れ合う条件を通して自己を知る』という視点を持たせていただいていることはとても貴重なことだと思います。そうした大事なことを学んでいる自覚を持ち、次の世代にその価値を伝えていく使命が私たちにあると改めて思いました。

また、私は四十年余り前に学び始めた頃からTさんの奥様を存じ上げておりました。千葉支部と高年講座のお役をいただかれ、五年前からご主人様もご一緒に学ばれていることを本当に嬉しく思います。お姿は見えなくなってはいますけれども、奥様の思いをこうしてお話しくださることで、心の繋がりの大事さを改めて思いました。

最後に、今日の日を迎えるまでには本部の願い、受講生の願いがあり、またご家族がどんな思いで送り出されているのかを思います。ご家族との話し合いのなかで主体的に不参加を決めた受講生も含め、それぞれの思いの深い一日を皆さんと共に持てたことに感謝します」と述べ、会を締めくくった。

その後、幼児教育部の母親たちから寄せられたメッセージを高年部責任者が紹介した。コロナ禍にあって例年のように子どもたちが歌とお遊戯で直接お祝いすることは叶わなかったが、心を繋ぐ交流となった。

翌週、責任者は開講の後日談を報告した。「Iさん（九十代女性）は、この夏、ご主人が自宅で熱中症を発症し、一時は危険な状態になったことから、一緒に家にいても不安だし、今日のように自分だけ外出するのも不安だと発言されました。理事長は高齢の方の『家にいても心配な要素が出てくる』という気持ちを受け止めた上で、今、年齢に拘わらず危険な要素に囲まれた社会を生きているなかで、自分が何を課題とするのか、その軸を持つことが大事だとおっしゃいました。Iさんは自分を省みながら帰宅すると、ご主人は庭に出て元気に草刈りをして待ってくれていたそうです。またTさん（女性）の娘さんは、感染を心配しTさんが外出するのを止めていましたが、開講に参加し見違えるほど元気になって帰宅したTさんの変化に、学びの価値を再確認されたとのことでした」

報告を受け、理事長は「会場づくりや会の途中の配置換えなど、受講生の皆さんができる限り自分たちでされようとするお姿、所作に、創設者が説く『自立の精神』を感じ、感動しました。またTさんと娘さんのお話は精神的、肉体的、経済的とさまざまな側面を持つ人間が、家に居さえすれば安心かというと、家にずっと居るなかで気持ちが萎えていくということを実感するプロセスで、改めて『バランスの大事さ』を思いました。人間には物質的、生物的、精神的、社会的、文化的側面があり、そのすべてを総合して捉える人間観を私たちは学んでいます。人間が絶妙なバランスの中に生かされていることを知り、そのバランスを欠いていく自分の生き方を見つめ直すことの大事さを感じました。とても積極的で温かい雰囲気の高年講座開講でした」と述べた。

野村佳子記念館
秋の風景

コロナ禍の中で　何を課題とするか

山口連絡所責任者　武永倫子

新型コロナウイルスの感染が広がり始め、東京での三月全国講座生勉強会と創立記念日のお祝いが中止となりました。その連絡を受けた時「地域の活動に指針がいただけない」と狼狽えてしまい、毎月、金子理事長から講義を受け、全国各地のリーダーの方たちとご一緒に学べることを当たり前にしていましたが、私にとって拠り所となっていたことに改めて気づきました。地域によって感染状況が違うなかで、山口連絡所としてはどのように活動していくのか、主体的に考えなければならず、そのことが課題となりましたが、今まで本部に決めていただけるものと受け身でいたので、それは容易いことではありませんでした。当たり前にしていたことができなくなるという条件を通して、山口での勉強会も責任者として本当に持ちたいと思っているのか、何のために学ぶのか、本当に学びたいのかを自分に問わざるを得なくなりました。

七月に全国講座が開講を迎え、それは金子理事長の「オンラインという形であっても、とにかく皆さんに会いたい」との願いがあり実現したと伺いました。会いたいと思ってくださる方がいて、私もお会いしたいと思う方がいる、このような繋がりがどれだけありがたいことかと思い、本当に嬉しかったです。

広島会場で受講し、帰宅した後、近所の方から「山口でも感染者数が増えているのに、もっと多い広島に行ってきたと聞いた。この地区から感染者を出したくないので、しばらく外に出ないで家でおとなしくしていてほしい」と言われました。しっかりと感染対策もしているし、大事なことで行ったのにとカッとなりましたが、敵対心を持つ自分に気づき、気持ちを切り替えてお話をするなかで「持病があるのでコロナにはかかりたくない」とおっしゃり、不安なお気持ちが良くわかりました。しかしそのことから、私は次第にコロナウイルスの感染そのものよりも、感染したら何を言われるか、ここで暮らせなくなるのではないかという不安の方が大きくなり、気が重くなりました。そのことを翌月の全国講座で発言すると、理事長から「良くも悪くも今まで人さまの言うことを気にしないように見えたあなたが、そんなに気になるようになった。それは成長です。そこを深めて下さい」と言っていただきました。

私は学び始めて、先輩方からずっと「人さまに関心が無いように見える」と言われ、そのことを課題にしてきました。自分の気持ちを探ると、人に関心を持ったら自分の心がかき乱されるのが嫌だという思いがありました。それは私の両親が気持ちや感情を出し合って喧嘩になり、それが嫌で批判し、自分は理性的になりたいと思ってきたからだと、気づいてきました。学ぶなかで、実は両親は信頼し合っているからこそ、ありのままの気持ちを正直に出し合えるのだと教えていただき、両親への見方を変えてもらいました。それから自分の気持ちを正直に見られるようになり、相手にもさまざまな気持ちが動いていることを感じ取れるように変わらせていただいたのだと、このことを通して確認になりました。

また六年前、夫が交通事故に遭い、突然の別れとなりました。本当に胸が詰まり息ができなくなるほど、心底からの悲しみでした。夫は歩行中に自動車に撥ねられて、私は相手の方への憤り、恨みに苦しみました。それはマイナスな感情だと、自分の中に押し込めていましたが、その当時、全国講座でその思いが噴き出てきて、理事長に聞いていただきました。そして「どんな気持ちも尊いのです」と言っていただき、ありのままの悲しみを出すことができました。そこから現実を受け止めて、義母と二

人の生活に踏み出せたこと、またその後、義母との生活に葛藤が出た時、理事に「ご主人亡き後はあなたが家の主となり、その立ち位置に立つこと」と指導をいただき、義母と暮らすこの家で生き続けようと気持ちが定まったことを思い出しました。

先月、台風十号が上陸した時、義母の安全を守らなければと備えをして疲れてしまい、こんな時に夫がいてくれたらと不安で心細くなりました。また、最近物忘れの進んだ義母の食事の心配、薬の管理、体調のことなど一人で支えるなかで、夫がいてくれたらと思ってしまう自分に、それを言っても現実には叶わないことだからと、その思いを押し込めていたと気づきました。義母に安心して暮らしてもらおうと思っていても、何度も同じことを言う義母に対して邪険にしてしまうことを繰り返す自分が嫌で、認めがたく、めげていました。その苦しい気持ちを山口連絡所を担当してくださる先輩や、仲間に聞いてもらうと「お義母さんの生活を守ろうと真剣に思うからこそ腹も立ち、いろいろな気持ちが出てくる。自分の気持ちを正直に見るようになれているから、頑張れているのでは」と言っていただき、自分を認められました。

「新型コロナウイルスの出現」により、人間同士が直接会える機会が少なくなっている今、本来の繋がりとはどういうことだろうと改めて思いました。夫を亡くした時、目の前にいないと繋がりはもう無いと思ってしまったことから、理事長に「ご主人のＤＮＡは確実に娘さんやお孫さんたちの中に生き続けているでしょ」と言っていただき、命は繋がって続いていくのだと、夫が命を懸けて教えてくれたと思いました。そのことを思い出し、今までは直接会えるのが当たり前でしたが、人間同士の繋がりは、目に見えるものだけではないのだと思いました。今、絶えず揺れ動く、矛盾に満ちた複雑な思いを仲間に聞いてもらい、人さまの気持ちも聞かせてもらうという繋がりの中で、安心感を持てている、これが人間本来の繋がりなのだと思い、その繋がりを大事にしていくことがコロナ禍で必要なことではないかと思います。そしてまずは一番身近な義母との繋がりを深めていくことに願いをもって、学び続けていきたいと思います。

世界に目を向け 自己教育の課題に

幼児教育部

八月初旬、特定非営利活動法人 難民を助ける会の柳瀬房子会長より金子由美子理事長宛に「世界の難民・避難民を新型コロナウイルス感染症から守るため、視覚で感染予防の注意喚起を促すためのポスター公募とクラウドファンディングを企画しました。このことを多くの方にご紹介いただきたい」とのメールが届いた。同会とは相馬雪香前会長と当センター創設者野村佳子初代理事長との出会いに始まり、以来四十五年にわたり親交を深めてきた。（詳細は本紙四一三号）

柳瀬会長の今回の企画に込められた切実な思いは、私たち一人ひとりが世界中の難民、避難民の過酷な状況に関心を持つことであると受け止め、自分たちの教育課題としてその協力を十七の拠点を結んで行った運営会議で、全国の各支部・連絡所のリーダーたちに伝えた。今年は新型コロナウイルスの影響で、毎年開催している全国青年部・幼児教育部合同夏合宿が行えず、幼児教育部の母親たちは「全国の幼児部の子どもたちが友だちとの思い出作りができなかったね」と話し合っていた。幼児部責任者のUさんは、担当理事から運営会議の話を聞いてどう感じたかと聞かれて「私は募金をさせていただきたいと思いました」と答えると「あなたはそう思えたのでしょ。その気持ちを全国のメンバーの母親たちに投げかけてみたら？　ポスター公募を通して、皆で世界中の困っている人たちに心を寄せられるのではないかしら」と助言を受けた。

改めて、Uさんはホームページを隅々まで読み、難民や避難民の厳しい現実に驚いた。我が子と同じ年頃の子を持つ母親が夫を殺され、子どもたちとミャンマーから十日間歩いてバングラデシュまで逃げてきたことを知りショックを受けた。そのことを東京近県から通う本部幼児部の母親たちに話すと、皆、爆弾や地雷を心配せずに暮らせることが当たり前ではない、世界に目を向けたいと思い、夫や子どもたちとも話し合いたいと意識が変わっていった。それぞれの家庭で子どもと一緒にホームページを見ると、小学五年生のRちゃんは「きれいな水がなくて手が洗えない子がいることにビックリした。困っているお友だちのためにポスターを描きたい」と言い、小学六年生のT君は「学校で勉強をしたり、家でご飯を食べたりする生活は当たり前じゃないんだ」と話した。母親たちは自分の意識の変化が子どもに繋がっていることが実感となった。

そして全国の幼児部と児童の母親たちとも共有するなかに、群馬支部幼児部のメンバーで中学校教師をしているNさんは「先生方や生徒たちと共有したい」とUさんに話すと「それは大事なことだよね。でもまずは自分の子どもにも話をしてね」と伝えた。Nさんは小学四年生の息子のT君に話すと「僕も描きたい」と言うので嬉しかったが「休日に、息子に付き合いながら作るのは大変だな」とも思った。その後、T君に締切日などを話すと「やっぱり描かない」となってしまい、仕事だと必死になるが、我が子には大変だという気持ちが上回る自分にショックになった。それを聞いたUさんが理事に繋げると「Nさんの心が動いたから、T君の中に世界への目が開けたのよね。その意味がわからないと折角の子どもの芽を摘んでしまうことになるのよね」と言われ、Nさんと話し合うと「真剣に受け止めたい」と話した。幼児部と児童の母親たちは、親の意識の有り様がいかに子どもに伝わるかを噛み締めた。

こうしたプロセスを通り、願いを込めてポスターを作り、父親も参加する家庭もあった。青年部も含め、十七点の作品が集まり、後日寄付金も同会に送った。母親たちは創設者が願われた、世界の人たちに関心を持ち、人さまと自分を共に考えられる自分づくりを期した。